
“カワラケ”小考

吉岡康暢

「権力表象の場と儀礼」のテーマにかかわる考古学的素材としてとりあげられてきた“カワラケ”論の驥尾に付して、若干の私見を述べる。

カワラケとは、中世的食器の指標となる器種の単純化(法量の画一化)、製作技法の省力化がすすむ一方で、都市平安京における多産地の食器複合の帰着として、特定の機能を分担するようになった京都の手捏ね、素焼きの皿と、それを原型とする各地の轆轤製品を含む土師器皿(大小)のことである。平安京の土師器が皿形態をとるようになるのは9世紀末から10世紀初頭ごろで(註1)、北陸西部では10~11世紀の開発領主居館での土師器碗皿類の一括投棄が注目されていたが(註2)、近年、陸奥国府=多賀城でも10世紀前半代になると、使用痕のない非内黒の坏類を主体とした土器10~20個から200個以上がまとまって廃棄された土器溜の調査例が報告されている(註3)。100個体単位では都城の境界を意識したかと思われる万燈会などの灯明皿にあてられた例があり、10個体単位は上級官人の役宅に伴う饗宴・儀礼の器と推定されるなど、地方政庁でも周辺村落と異なる土師器の非日常用器への転化が証明されつつある。百瀬正恒は、中世京都における土師器の大量消費と一括廃棄にみられる特異な側面に着目し(註4)、河野眞知郎もまた鎌倉における同様の出土傾向から、カワラケは一般的な供膳具ではなく、「宗都的行事や会食など非日常的機会に、多量に消費され」、「素焼で未使用という清浄さを維持する保守的な生産体制」が考えられる点で、「古代の土器とは決定的に異なる」(註5)と論じた。これをうけて藤原良章は、呪詛・出産等の習俗まで射程におさめ、都市的な場での使い捨ての属性を強調し、「中世を代表する食器、或は中世の供宴の意味を象徴する食器」(註6)として概括した。しかし、カワラケ論には、その成立過程、伝播の地域・階層性や機能の変容など、なお検討を要する課題が多い。

土師器がいつ、どのような契機で、宮廷の年中行事や、恒例・臨時の法会・祭儀など貴族・寺社の儀礼用、一過性のハレ=「公」の器として定着したかを土器型式論の枠組みで明らかにするのはむずかしいが、碗形態の黒色土器とともに緑釉陶器が京内で普及する10世紀代は、土師器が皿形態=酒杯・肴(菜)皿化する第1段階と考えられる。この時期の平安宮内裏地区では、儀器専用の白色土器(『執政所抄』の「栗栖野様器」)が顕在し、撰関家の節会や忌日には、「朱器大盤」(漆器)-白色土器-土師器の階層性が認められる。ただし、ときには中国磁器碗もみえ、宮中에서도正月の三節、齒固の儀や精進日、祈雨修法などには、尾張・美濃産の高品質の緑釉陶器が12世紀初葉まで供用されるなど、多様な使い分けがみられる(註7)。

そのさい留意を要するのは、儀式の後段に組まれた宴座(式三献)が弘仁初年(810年代)以降唐

様の儀器を用いたと推定されるのに対し、場を変えて行われる穩座（平座）では、もっぱら土師器皿が用いられることである。儀式－宴座－穩座の祭式構造が、神祭－直会－肆宴に対応する^(註8)とすれば、宴座と穩座の区別は律令制的祭式の原型が準備された推古朝ごろまで遡る可能性があるが、三献後に土師器を用いることは10世紀後半には確認できる（『西宮記』11日列見条）。宮中の旬日や、左大臣藤原頼長邸の賀茂下社詣りや彼の子の袴着の儀の酒器が銀器・漆器から土器に代えられている^(註9)ことは、土器組成の推移、および10世紀末～11世紀前半に藤原資良邸が所在した左京北辺三坊六町内膳町遺跡などにみられる食器類の大量廃棄とよく対応する^(註10)。

こうした土師器皿の消費形態が、やがて神権的人格をおびる「院」の政権の登場とともに、君臣秩序の確認の場としての饗宴空間の膨張によって増幅された。そのことは、11世紀末から13世紀中葉にかけて院近臣の役宅が営まれた、鴨東地区白河北殿北辺にあたる京都大学構内遺跡で、食器の消費量が急増するとともに、土師器皿の食器の96%を占める状況^(註11)に端的に示されている。この段階で饗宴具は、カワラケ＋白磁四耳壺（青白磁梅瓶）＋折敷・箸のセットとして定式化されるが、カワラケが緑釉陶器のごとく官製品として制度的に創出されたのではなく、簡便化を志向する民需用食器の極限ともいえる産物で、穩座に限り使用されたことの意味があらためて問われよう。穩座の性格を身分序列確認の場とみるか、無礼講的な共食の場としての側面を重視するか議論が分かれようが、カワラケには古代前期（7・8世紀）の金属型食器、後期（9・10世紀）の磁器型食器が形態上貴賤共有でありながら、金属器－漆器－施釉陶磁器－各種土器という器質別の厳然たる身分制を保持したのと異質の、[〃]下剋上の文物、ともいうべき中世的論理がうかがわれるように思う。

「上より始まりて御箸くだり、御土器まるる」（『宇津保物語』）穩座での、尊者に始まる回し飲みを一過性のサイクルとして酒杯を廃棄する行為は、王朝顯貴層のカワラケ観を代弁する清少納言の「きよし」とみる感性（『枕草子』）、ひいては邪気を祓い流し再生・復活を祈念する貴賤共有の基層信仰に連なる^(註12)。その意味では、式三献の唐物儀器と対照的な四献以後のカワラケに、和様儀器としての性格を付与することもできよう。嵯峨朝（809－822年）で唐風に整備された宮廷儀礼が、宇多朝（887－896年）以後、場の中心を後宮に移し、奢侈・遊戯化しつつ和風の年中行事に変容を遂げるとする通説^(註13)は、儀器の消長と整合させておおむね理解できるように思われる。

ここで検討を要するのは、上記の都市顯貴層や寺社権門でみられる儀礼的な場における盛用とは別に、カワラケをさきの中世固有の[〃]下剋上の文物、の一環とする視点とかがかわらせ、京都系土師器を規範とした畿内と周辺国（近江・丹後など）の土師器皿、および中世初期（11世紀後半～12世紀前半）に古代末期の食器組成を再編し、独自に食器圏の形成を終えていた西国各地の土師器の用途の二面性である。中世の京都では500年間一貫して土器・陶磁器の90%以上を占める土師器は、伊野近富によれば大皿1・小皿3を一具として出土し、重量から試算すると、1戸主（約500㎡）の年間の消費量は約42具（耐用8.6日）になるという^(註14)。磁器・漆器皿の存在を考慮するとしても、京都での均一的な大量出土の状況から、饗宴・儀礼用器のみならず、多分に使い捨てかつ補助的な副食器（菜・調味皿）、後半にはとくに灯明器としての広範な使用を考えるべきであろう。同様のことは、畿内ではたとえば、丹南鋳物師（「右方」丹治氏）の拠点的な生産村落群として注目されている日置庄遺跡（大阪府南河内郡美原町・堺市）の土器・陶磁器組成を、集村が確立する14世紀代について分析した鋤柄俊夫の集計結果^(註15)によれば、一般の村落域と隔離して営まれた方1町（約

12,000㎡)の土豪屋敷Aを頂点とし、それに準ずる複数の屋敷B(約2,000㎡)と在家屋敷群C・D(約600㎡, 1200㎡)の重層構成をとり、A・Bの瓦器塚・土師器皿の面積当たり出土率はC・Dの3倍に上り、それが単純に消費量の多さを示すのか、非日常的な使用頻度の高さを物語るのか確定しにくい、全体的に瓦器塚と土師器皿の量比は1対1とされるので、土製供膳器として機能したことを示すごとくである。

また、西都大宰府の12世紀代を中心とする中世食器が、多数の中国陶磁を消費しながら碗に比して皿は少量で(白磁碗で5.3倍、青磁碗で6.2倍)^(註16)、土師器は坏(皿)・小皿とともに有台碗・丸底坏(皿)などのセット構成を保持し^(註17)、瀬戸内の代表的な地域門前・港湾町草戸千軒遺跡でも、13~14世紀代は有台碗→碗・坏・小皿のセットが溝・土坑・井戸に大量に投棄され、ここでは遺構の整地のさいの儀器と説明されているが^(註18)、西国各地と東海で類似の出土状況を示す瓦器、須恵器系、灰釉陶器系碗・小皿と同様、漆器・磁器と補完ないし組み合い日常食器の一端を構成していたとみられる^(註19)。このようにみても、『橘直幹申文絵詞』にのせる菜物売りの店頭の様子は、都市部ではカワラケが民衆の日常的な「ケ」=「私」の食器としても大量に消費されたことを垣間みせてくれる絵画資料となろう。上記で大過なければ、藤原の見解は、つぎにふれる12世紀中葉以降の京都に直結した東国の都市における顕貴層を中心とする使用形態に限定された社会史的評価となろう。

ところで、平安京で構成された饗宴具セットは12世紀中葉に列島規模で拡散するが、古代の土器生産体制がほぼ解体していた北陸と甲信越を含めた東国では、東北北辺の都市ないし開発領主層にまで急速に波及した。奥州藤原政権の拠所である岩手県平泉柳之御所遺跡の政庁・家人屋敷・苑池域から出土したカワラケは15トンに上り、13世紀前半ごろまで南奥と対照的に中崎館遺跡(弘前市)や矢立廃寺(大館市)など一連の津軽に達する平泉政権の要衝で定量出土し^(註20)、北奥固有のカワラケ圏を形成するのは、東国におけるカワラケが権力表徴の場と儀礼を演出する道具であったことを端的に示している。

そして、この事象は鎌倉に引き継がれ、13世紀中葉からの100年間で2,160万個が消費されたと試算されており^(註21)、在地系の轆轤製土師器も皿形のみとなり、京都系土師器に同化する。おそらく、この時期北陸・東北の各地で一斉に開窯する須恵器系陶器窯^(註22)と同様、西から招かれたカワラケ工人(女性)がその生産に従事する場面も想定され、奥州藤原氏と鎌倉政権を支える在地領主層まで、のちの武家故実の素地をなす公家風の儀礼習俗が受容されたと推察される。

問題は、このように中世社会の成立期にすみやかに「カワラケ文化」を受容した東国で、都市部を除きなせ中世を通してこれが定着しなかったかである。東国における13世紀後半以降の土師器皿の推移は、(1)それが消滅する東北北部、(2)在地系の轆轤製土師器へ回帰し、出土量が急減する東北南部、(3)一部で14世紀代まで手捏ね製品が残り(常陸・下野)、あるいは轆轤製品のみしか確認できない(房総)など、国単位に技法と使用量の変異をみせながら定量消費された関東から東海・甲信の三地域圏にまとめられるが^(註23)、この段階でいぜん大量消費がつづいていた鎌倉では、臨海地(前浜)に集団居住区を開拓した下層町人も土師器皿を相当量消費している。この事実、貴賤が密接して共存する中世都市鎌倉で、全住民に饗宴の場の拡大を含め都市型消費志向が定着したと解するのが自然であろう。

ただし、首府鎌倉以外では13世紀後半代を中心に、鎌倉タイプの轆轤製カワラケが南奥以東の各地で認められるものの、遺跡のあり方および出土量の僅少さから、たとえば御家人の東遷に伴う在地住人との主従関係の確認や屋敷構営などの儀礼的な場での使用を想定する意見もある(註24)。さらに、13世紀後半～15世紀代のカワラケの出土が皆無に近い北奥(米代川-馬淵川以北)では、蝦夷管領安東氏一族の居城と推定される青森県尻八館跡(青森市後潟)から発見された1点のカワラケが漆塗りであった(註25)ことに象徴されるごとく、日常食器・饗宴器はともに漆器とみてよく、10世紀後半以降、渋下地塗の粗製漆器(註26)が普及していた東北北部(註27)では、地域固有の生活様式が確立する13世紀後半段階で、一過性のカワラケを駆逐したと考えられる。したがって、東国の村落部で土師器皿の出土量が限られるのは、漆器への移行が西国より徹底し、使い捨ての食器になじまない食習俗を反映しているとみるべきであろう。

このようにみえてくると、小野正敏がカワラケの出土量の多寡を、「都市の中での社会的な階層性を示す」とともに、「京都との文化的なあるいは政治的な距離をも示す」(註28)指標としたように、すぐれて権力表徴と儀礼のシンボリックな存在であるが、同時に西国では都市、村落を問わず補助的にせよ民衆の日常食器としての側面をもっていたと判断される。そのことは、中世前期の東国で欠落していた土製煮炊器が、西国では鉄鍋と定量併用されたこととも連動しており、西国の低品質・消耗品志向に対し、東国では高品質・耐久品志向という社会的分業形態に規定された、物質文化に対する価値観の差異の潜在を考えさせる。すなわち、古代的土器生産体制がほとんど解体した東国と異なり、寺社権力に寄生する神人・供御人=座的生産・流通体制を基盤とした西国の旧守性(註29)として一応説明できよう。

なお、カワラケについては、殺生禁断、触穢思想の地域性(註30)との関連や、14世紀後半以降、灯油の普及に伴う油皿(灯明皿)としての利用と地域・階層性の解明、16世紀にみられるカワラケの二次的広域伝播の問題など論じ残した点も多いが、今後に期したい。

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

註

- (1) — 平尾政幸「平安時代前期の土器」京都市埋蔵文化財研究所『右京三条三坊』(1990年)ほか。
- (2) — 吉岡康暢ほか『加賀三浦遺跡の研究』石川県・松任町教育委員会(1967年)、および以後の田嶋明人の作業。
- (3) — 村田晃一「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』36(1995年)。
- (4) — 百瀬正恒「平安京及びその近郊における土器の生産と消費」『中近世土器の基礎研究』1(1985年)。
- (5) — 河野眞知郎「鎌倉における中世土器様相」神奈川考古同人会『古代末期～中世における在地系土器の諸問題』(1986年)。
- (6) — 藤原良章「中世の食器・考一<かわらけ>ノート」『列島の文化史』5(1988年)。
- (7) — 野場喜子「平安時代陶磁器の使用例について」『名古屋市博物館研究紀要』10(1987年)。
- (8) — 倉林正次『饗宴の研究(儀礼編・文学編)』(1965・69年)。
- (9) — 註6文献。
- (10) — 平良泰久・奥村清一郎ほか「平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要」京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-3)』(1980年)。
- (11) — 宇野隆夫「10・11世紀の土器・陶磁器」『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』(1989年)。
- (12) — この点は、松本建速「柳の御所跡におけるかわらけ存在の意味」『岩手県埋蔵文化財センター紀要』12(1992年)でも重視している。
- (13) — 山中裕『平安朝の年中行事』(1972年)など。

- (14) — 伊野近富「土師器皿」『概説 中世の土器・陶磁器』(1995年)。
- (15) — 鋤柄俊夫「畿内における土器・陶磁器の定量分析」『貿易陶磁研究』15 (1995年)。
- (16) — 池崎謙二「博多出土陶磁器の組成について」『貿易陶磁研究』4 (1984年)。
- (17) — 山本信夫「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究』IV (1988年)。
- (18) — 鈴木康之「土師質土器の用途に関する研究ノート(1)(2)」『草戸千軒』197・198 (1989年)。
- (19) — 鈴木は、儀器説の根拠として、(1)完器が集中投棄され、破片化した土鍋や陶磁器と出土状態が異なる。(2)時期が下降するにつれて製品が粗略化し、法量も縮小しながら量産が加速された。(3)埴が備後より早く13世紀代のうちに消滅する隣接国がある、と主張する。しかし、(1)は中世に顕現する土製食器の短期間、ときに饗宴・儀礼用カワラケのごとき一過性の使用形態を前提にすると、建物などの廃棄儀礼に伴う土製供膳器の使用は十分首肯できるが、鈴木が想定するような大量投棄は一般的に認知されておらず、町割や建物の造改時に土器類を更新することも考えられるので、複合的な使用形態から生じた廃棄パターンの集積と解することもできると思われる。(2)は土器の型式変化に普遍的な事象で、廃棄儀礼とすればなぜ埴・坏・小皿のセットが必要だったかを説明する必要がある。(2)とかがかわる(3)は、儀器とすると鈴木という通り儀式的展開に地域的なずれを考えなければならなくなる。だが、日常器か儀器かの問題とセット構成は一応分けて考えるべきで、中世に土器生産を含めたさまざまな分野で古代的体質を濃厚にまもっていた西国、とくに畿内と周辺では、草戸千軒遺跡で15世紀に埴・坏・皿から多法量の皿へ移行することに示されるように、京都、東国では前期に一般化していた土師器の皿単一化が、後期によりやく実現するさいの地域差とするのが妥当ではあるまいか。なお、近年山茶埴の観察の結果、遺跡によって使用痕ないし生産地での使用を容易にするための削擦痕が60～70%に達する遺跡があると報ぜられている(尾野善裕・藤沢良祐ご教示)。
- (20) — 註11松本文献, 三浦圭介「考古学的に見た奥州藤原氏と津軽地方の関係」『年報・市史ひろさき』3 (1994年)。
- (21) — 斎木秀雄「かわらけの個体数計算の試み」『鎌倉考古』42 (1984年)。
- (22) — 吉岡康暢『中世須恵器の研究』第2部第4章第1節 (1994年)。
- (23) — 浅野晴樹「東国における中世在地系土器について—主に関東を中心にして」『国立歴史民俗博物館研究報告』31 (1991年), 笹生衛「房総の中世土器様相について」『史観』23 (1991年), 中・近世研究班「茨城の中世かわらけについて」『研究ノート』4 (1995年)。
- (24) — 中山雅弘「福島県における中世土器の様相」『東国土器研究』1 (1988年) およびご教示。
- (25) — 三上次男・岩本義雄・大橋康二ほか『尻八館調査報告書』青森県郷土館 (1981年)。
- (26) — 四柳嘉章「古代～近世漆器の変遷と塗装技術」『石川考古学研究会々誌』34 (1991年)。
- (27) — 三浦圭介「日本海北部における古代後半から中世にかけての土器様相」日本中世土器研究会『シンポジウム 土器からみた中世社会の成立』(1990年)。
- (28) — 小野正敏「中世みちのくの陶磁器と平泉」『日本史の中の柳之御所跡』(1993年) 59頁。
- (29) — 註21文献, 40～42頁。
- (30) — 伊藤喜良「南北朝動乱期の社会と思想」『講座日本歴史』4 (1985年)。
- 補註 小稿は全面改稿の余裕をもてぬままに、『岩波講座日本通史』8 収載の拙稿「食の文化」第1項「カワラケ論の周辺」に一部補筆したもので、論旨に変更はない。